

部落問題文芸作品選集 第四十九卷

昭和五十五年二月二十日発行 定価 二二〇〇円

発行者 松本明

発行所 株式会社 世界文庫

東京都目黒区洗足二丁目一五丁目152

電話 〇三(七一六) 六一五一(代表)

振替 東京 四一七八四九八番

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

部落問題文芸・作品選集

第49卷

黙阿弥 お静礼三 橋浦泰雄 驟雨

大村嘉代子 渡り初め 藤範晃誠 白道を帰る

世界文庫版

目次

- | | | | |
|----|-------|--------|-------|
| 一、 | お静礼三 | 河竹默阿弥著 | 5 頁 |
| 二、 | 渡り初め | 大村嘉代子著 | 145 頁 |
| 三、 | 白道を帰る | 藤範晃誠著 | 183 頁 |
| 四、 | 驟雨 | 橋浦泰雄著 | 205 頁 |

吹雪飛上町粉靜

二世と契りし辻堂にておもはぬ難
に奥州屋の礼三が身をば捨鐘も法
華伝次に助けられ佗びた住居の其
中へたづね廓の裏道と聞いてお民
と与惣兵衛が義理にしがらむ縁切
もあはれお靜は七つ子を杖にさま
よふ目なし鳥それとさとりて宗右
衛門娘お早のいひわけも世も牛島
と麦庵の悪事を見いだす半兵衛が
吉事を告げる商家のをさまり

「お靜禮三」は慶應三年二月、作者五十二歳の春、市村座に於て書卸された。「傾城草履打」と共に新作されて、「契情けいせい會我あわれ願ねが經る」なる大名題の下におかれてあつた。この作は此頃の若手の花形として人氣の盛んであつた田之助と家橘(後の五世菊五郎)とを中心として、非人と町人との情話を題材とした世話物で、好評を以て迎へられた。殊に小磯ヶ原雪降りの場の別れなどは、後年和國太夫によつて義太夫の語り物にまでされた。又その場へ出て來る駕昇が、いつもの敵役でなかつたことが見巧者連の間に取沙汰されたともいはれてゐる。此の作はこの作の上演された數年前に、淺草に實際あつた譚を噺家の柳櫻が作者に話した。その事實によつて新作したものと云はれてゐる。然し事實の方は女が町人で男の方が非人であつたといふ。

書卸しの時の役割は、澤村田之助(お靜)、市村家橘(禮三郎)、坂車龜藏(鐘爐ノ牛兵衛、法華傳次)、關三十郎(劍澤參庵、奥州屋宗右衛門)、市川新車(奥州屋の女房お民)、河原崎國太郎(奥州屋の娘お早)、市川左團次(牛島主税)、坂東三八(非人まむしの仁三)、坂東薪左衛門(川うそ新太)、坂東太藏(ちや／＼馬道八)等であつた。お靜は又お賤ともなつてをり、傳次は傳二ともなつてゐる。

挿繪にしたのは、國周筆の錦繪で、小磯ヶ原の場である。

大正九年八月

校訂者誌す



吹雪ふき花小町のはなこまち於靜お静禮三（三幕六場）

序 幕

御行之松雨舎の場

鶯春亭入口の場

田川屋座敷の場

大川橋身投の場

〔役名〕 鎮座ノ半兵衛、飢澤參庵、牛島主税、奥州屋手代禮三、半兵衛乾兒金太郎、目觀進市介、女太夫小町お靜、奥州屋女房お民、同娘お早、同下女お國、女乞食お捨、お靜娘お千代、其他。〕

〔御行之松雨舎の場〕 本舞臺後一面の淺黃幕、下手に出茶屋の後を見せたる藁蓆張り、薄き雷かみなりの音にて暮明くれあけく、と下手よりお捨、襦袢袴じゅばんばか、跛こつぱの日和下駄ひよりけた、女乞食おにぎりの打扮てしんにて、子供こどもを背負せみひ番傘ばんさんを持ち出来る。上手より市介、手拭てぬぐいを被り日動進ひくみじんの打扮てしんにて出來り、舞臺にて行違いさぐひ、

市介 おい、お捨何處へ行くのだ。

お捨 おや誰だと思つたら市介さん、お前、内のお靜坊を見掛なかつたかえ。

一、お靜礼三 市介 お、お靜さんは、先刻笹ささの雪の前まへに見掛けたが、さうして何ぞ用でもあるのか。

お捨 なあにお前、晝時分から此の通り雷様が鳴るものだから、あの子の父親が氣を揉んで、不斷から強い嫌ひゆゑ嘸困つて居るだらう。雨にても降られてはならねえから、御苦勞でも探しにいつて、居たら一緒に連れて歸つてくれとの頼みだから、斯うして傘を持つて探して歩くのだわな。市介 さうか、それぢやあもう一足早えと、直に逢ふ所だつたが、もう今時分は大方園子坂あたりへ行つたらうよ。

ト此の中段々 雷の音大きくなる。

千代 怖いから早く歸らうよ。

市介 おゝ、千代坊か、脊負ていゝな。

子役 爺やあ、一緒に行かう。

お捨 何だ、爺やあと歸りたい、それだから内に居なといふに、一緒に行くんだくといつて、困つた子だつちやあねえ。

市介 おいゝゝ、そんなに叱んなさんな、どうせもう内へ歸るから、それぢやあ己が連れて行つて遣らう。

お捨 さうかえ、そんなら己等は歸りがちつと遅くなるかも知れねえから、お前この子を連れていつて

くんなな。

市介 おつと合點だく、それ背負しろ、(ト背中を出す、お捨、市介に背負せる。) やれく、大層重くなつたぞ、ほんに此の子をお靜坊が産んだとは思はれねえの。

お捨 ほんにさうだよ、何處へ出しても兄弟としつきやあ見えねえ。

市介 さうして、己あ、此の子の父親といふのをついぞ未だ見たことがねえ。

お捨 さうかえ、それぢやあこんだ教へてやるが、何様にお前好い男だらう。

市介 さうか、さうして聞きやあ奉公人ぢやあねえか。

お捨 あい、傳馬町二丁目の奥州屋といふ小道具屋の若い衆だといふことだが、あの近所ぢやあお前業平禮三といつて、評判の色男だといふことだよ。

市介 さうか、其奴はお靜坊は素敵なものを引つ掛けたなう。

お捨 ほんに、あの子も仕合せだわな。

市介 それぢやあ、なんなの、流しに出た先きて、色にてもなつたといふことかの。

お捨 なんても二人の馴染めは光願寺の門番の、花屋の婆さんの内が出合場所だつたさうだ。

市介 は、あ、光願寺だから、それで門でとぼしたのだらう。

お捨 市介さん、おつう洒落たの。

市介 さうして親の傳二さんは、知つて知らねえ分とでもいふのか。

お捨 あ、いふ氣性な人だから、斯うして孫まで出来て居ても、渡りを附けに行かうぢやなし、打捨つて置くところを見ると、あのお靜坊も拾つた子で、根が素人の生れだから未始終は話合て、向ふへ嫁にでも遣るかも知れねえ。

市介 しかし己が素人にしても、お靜坊なら色になりてえ。

お捨 呆れけえらあ、何てお前と色になるものがあるものか。

市介 さう見限つたものでもねえ、これでも昔やア色男だ。

お捨 黒男が聞いて呆れらあ。

市介 又惡口をき、やあがるか。

ト又雷の音厳しく鳴る。

千代 爺やあ早く歸らうよ。

市介 進えねえ、ごうぎに雲行きが悪くなつて來た。降らねえうちに早く歸らう。

お捨 それぢやあお前、その子を頼むよ、

市介 おい、それぢやあ又晩に逢はう。

ト市介は下手お捨は上手へ別れて入る、雷の音にて淺黄幕を切つて落す。

本舞臺三間の間、後淺黄幕、少し上手へ寄せて注連を張りし大樹の松の木、これより下手へ所々に枝受けの丸太、中央に一間の辻堂本縁付き、この下手に石の手洗鉢、ずつと上手に竹の垣根、内より梅の梢を見せ、上下とも藪登すべて御行の松の體、上手に牛島主税大小着流し雪駄掛け浪人の打扮にて立かり、此の次に劍澤麥庵着流し一本差翳者の打扮にて雪駄を帶に挟み尻端折りにて居る。中央に鐘道ノ半兵衛着流し脚絆草履掛けにて羽織を疊み肩へ掛け立ちがり、傍に半兵衛乾分金太郎着流し脚絆草履にて、天窓へ王子土産を挿して立ちかり、此の後辻堂の縁端にお静女太夫好みの打扮にて編笠を被り三味線を抱へ腰を掛け居る、傍に奥州屋手代禮三羽織着流し雪駄掛けにて、短刀の入りし包みを持ち置手拭をして居る、下手に奥州屋娘お早振袖にて立ちかり、奥州屋女房お民母親の打扮にて立ちかり、傍にお國下女の打扮にて附添ひ居る、何れも雨舎りの模様よろしく、雨車きびしくばつたりと、雷の音にて此の道具納まる。と是れて女形皆々耳を塞ぐ、跡端唄の合方、鶯笛折々雨車のあしらひ宜しく、半兵衛麥庵に向ひ、

半兵衛 もし、きつい降りてござりましたな。

麥庵 左様でござります、今日ばかりは此のやうに降らうとは思ひませなんだ。

半兵 ほんに氣違日和とは此の事でござります。

お民 雨ばかりなら好いけれど、嫌ひなものがお鳴りなさるので氣が氣ではないわいなう。

お早 今の一ツは何處ぞへお下りなされた様子ぢやが、ほんにもう私や怖うてなりませんんだわいなあ
金太 なあにお嬢さん、お案じなさる事はござりません、わつちが附いてをりますから、まあ落附いて

おいでなされませ。

ト是れを聞き、半兵衛思入あつて、

半兵 それ光つた。(ト大きく言ふ、)

金太 あゝ桑原々々萬歳樂々々、

半兵 それ見ろ、人一倍先きへ怖がるくせに、御大層なことばかり言つて、意氣地のない野郎だなあ。

主税 いやもう古人の句にもある通り、初雷や今年も丁度梅の上と、えて、梅の咲く時分といふと時ならぬ雷のあるものだて。

麥庵 もし若旦那、昨晩は定めし廓でございませうな。

主税 いや二三日廓に遊んで居たが、天氣のいゝのに居續けも何だかどつとしねえから、友達のところへ行

つて見ようと、此方の方へ出掛けて来たが、さうしてお主やあ何處へ行つたのだ。

麥庵 急病人があるといつて、海老屋の寮から呼びに来たゆゑ、今行つて歸りがけてござります。

主税 さうか、そりや好い所で逢つた、いろいろ貴様に話すこともあるから、何處ぞそこらへ行つていつべいやりてえものだ。

麥庵 わしもお前さんにお聞き申したい事もあり、丁度好所でお目にかゝりました。

トこの中半兵衛、煙草入より火打道具を出し、火を打ちて煙草を呑んでゐる、麥庵これを見て、
麥庵 もし、憚りながらどうぞ一ツ貸しておくんないまし。(ト煙草を出す。)

半兵衛 さあ、お安い御用だ、お附けなされえ。

ト兩人煙草を呑むことよろしく、お静空を見て、

お静 段々疊つて來ましたから霽りさうもござりませんね。

禮三 どうか、もう一降りかゝりさうだ。

お静 困つたものでござんすな。

トこれにてお民禮三を見て、

お民 これ、其處に居やるは禮三ではないか。